新曲赫映姫

遺遥作

序

本篇は予が所謂新樂劇の第二の圖案なり。用意の『浦島』と同じからざるは、主として題材の然らしめし所なれど、また多少『新樂劇論』以外に出でゝ試摸し、以て其の不備を補はんと欲せしにも原けり。されば、彼れにては舞踊を本位と立てたるに、此れにては謠唱大分を占め、彼れは俗曲を髓腦となしたるに、此れは寧ろ能樂を根幹と做せり。但し構想、措辭、旋律、樂器等、一切舊格に泥むことなし。

卅八年十月中旬

著　者

人物

男性

竹取の翁
竹取の僮
阿倍の御主人　同小童
車持の皇子　同舍人　同小童　同雜人、甲、乙
工の司漢部内麿　同工人、甲、乙、丙
帝　大臣　官人、小童、雜人、等大勢
六衞の司　武夫大勢

女性

竹取の嫗
内侍中臣の房子　女官六人
赫映姫　同侍女甲、乙

處

前後とも竹取が家　畿内

時

前は彌生、後は仲秋　奈良朝時代

新かぐや姫

前之幕

第一段

竹取の翁と嫗と場に上る。

二人

千引石根は移すとも。千引石根は移すとも。
心根をいかで移さむ。

嫗

なう〳〵。わが夫に申し候ふ。凡人には似たまはぬ姫なり、帝の召させたまふをも畏しとは思はずとこそ宣給へ。強ちに責めたま

新かぐや姫

前之幕

第一段

竹取の翁と嫗と場に上る。

二人

〜千引石根は移すとも。千引石根は移すとも。
心根をいかで移さむ。

嫗

〜なうく。わが夫に申し候ふ。凡人には似
たまはぬ姫なり、帝の召させたまふをも畏し
とは思はずとこそ宣給へ。強ちに責めたま

はば實にやがて消失せたまひなむず。この上は如何に勸めたまふとも、其の效あるまじう候ふ。

翁

〈あはれ。それこそは、多くの貴人を悶えさせて、身をも誤らせつる心ばせの言はするなれ。有繋に帝の勅とあらば、懷かしき御答もするやと賴みつるに

翁

〈心あても虛ろとなりぬ。吳竹の節筒に生りし君なれば

嫗

〈たゞ一筋に眞直にて。剛くもありけり節ある性の

二人

〈こちなくぞあるや此の君。

嫗

〈もはや二度の御使の、御入あらうずる刻限にて候ふ。

翁

〈今更に是非もなし。よし御答を下されむとも、只ありのまゝに申さむとこそ思へ。いで〳〵、これにて迎へまゐらせうず。

翁と嫗と徐ろに好きところに坐ふ。

第二段

勅使、内侍中臣の房子、女官六人をゐて場に上る。

内侍

〈思ひの狹霧立つときは。天つ日だにも翳るなり。誰れかは闇に迷はぬ。

〈誰れか言つし。人生れて婦人の身となる勿れと。あはれ。百年の苦樂おのれが力に由るといふこと。天下幾人の身の上ぞ。

一同

〈容顔瓊の如くにして。人を移すの粧ひあれば。

葎が宿に生ひぬるも。卽て雲井の御詠め。

内侍

〈星の光りも氣劣りて

一同

〈み園生に匂ふ八千草の。花にも更に色ぞなき。

あら。目覺しの榮えやな。

と竹取が家の門に立停りて、内侍は女官の一人に向ひて

内

〈かけまくも畏き君の再の御使として、内侍中臣の房子が、まうできぬる由を申したまへ。

女官

〈心得申して候ふ。

と門内に向ひて

女官

〈いかに。讃岐の造麿はあるか。かけまくも畏き君の、再の御使として、内侍の君の御入にてあるぞ。とう〳〵迎へまつり候へ。

これを聞きて翁と嫗とは周章つる體あり。

姫　〜み聲を聞けば今更に

翁　〜こゝろ怕れて日に向ふ

姫　〜むぐらならなくに身ぞ顫ふ。

二人　〜なぞもかく心怕るゝ。

此の間に勅使一同は徐ろに進み入りて上座に坐ひ、翁と姫とは、入りかはりて下座に坐ひて會釋す。

内　〜いかに。造麿。いぬる日立歸り、御返りごとを奏し奉りつれば、帝以ての外のみけしきにて、此の國に住まむものゝ我が命令に背く、奇怪なり。よし姫は何といふとも、翁の手に養

育たらむものを、などか心に任せざらむ。もし姫を奉りなむには、翁に冠りを賜ぶべしとこそ。逆鱗にあはゞあしかりぬべきぞ。とう〜姫に勸めて仕うまつらせ候へ。

翁と姫とは恐れ畏みたる思入にて

二人　〜いとも〜畏しとも畏しや。

翁　〜いかで勅りを等閑には承り候ふべき。きのふもけふも、夫婦共に舌を爛かいて、彼の女童を說諭いて候へども、諾とも申さばこそ。强ひて宮仕へに出したて候ひなば、消失せなむと申す。

翁　〜この翁が手にて生せたるにても候はず。むか

し山にて見つけたんなれば。心ばせも人には似ず候ふ。

翁

〈この上は是非もなし。老いたる奴をば罪なはせたまひて、彼の女童をば赦させられ候へかし。

翁も嫗も悄然として思入りたる體なり。

内

〈あはれ。是非もなき御答ざふらふよ。かぐや姫とやらむは、實にも凡人にては在さゞんめり。さらぬだに情けの道は威ひをもて強ひたまふべきにあらざるをや。

内

〈東風暖を生じて。草木自から光りを浮ぶ。

一同

〈呵噓して花を促さば。瓶裡の牡丹發くとも。可惜ら傷まむ花の色。

内

〈いろ絲卷を繰返し

一同

〈たゞ小手卷の穩かに。とき諭したまへや。

と宜しく翁嫗を諭す科介あり。

翁

〈あら。有難き御情け。さはさりながら世に越えて

嫗

〈こはくもありける下心の

翁嫗

〈もし靡かずば如何にせむ。

内
〈げに珊瑚は碎くべうして。其の色を奪ふべからず。

翁
〈伽羅は燔くべしと雖も

三人
〈のこる香りを如何にせむ。

と三人思ひ惱む思入あり。やゝあり

内
〈思ひいでたり。此の家の。山本近んなるぞ幸ひなる。

内
〈み狩の行幸したまはむやうにて、偶と帝の立寄らせたまはむはいかに。

内
〈愛憎大かたは眼に在り。見みゆる卽て言ひ知らず

姫
〈くしき思ひの通ふてふ。

三人
〈ふしぎの驗し無からめや。

翁
〈なにごゝろもなくて候はむに、偶と行幸して御覽ぜられ候へとよ。

内
〈うれしやな。かくとだに

一同
〈なのりて歸る一つらは。霞む雲井の春の音づれ。如何ばかり。叡慮慰みたまふらむ。立歸り。いざや百敷に。聞え上げてむ。

と一同下手へ向ふ。翁と嫗とは入りかはりて上手へ廻る。

翁嫗　〈奴等は。行幸を待たむ。心して。君が行幸を待ちてむ。

と勅使を送り出づ。勅使場を退く。

第三段

翁と嫗とは元の座に坐ひて奥に向ひ赫映姫を呼出す。

翁　〈なう〳〵。あが姫やおはする。語らひ申すべき事のあり。とう此のところへ御渡り候へ。

奥にて

姫　〈なにごとにて候ふやらむ。やがて御前に參るべう候ふ。

と依然奥にて

姫　〈など狂ふ。地なる影に世人皆。光りは空にありし世の。其の來し方ぞ戀しき。

〈われ勝妙の資を享けて。嘗て青瑠璃の殿に在り。頭に七寶の瓔珞あつて。胸に纖塵の樂欲無う。行住一へに任す輿の來去に。只折々の奉仕とて。月の桂の花咲けば。黑衣白衣の天少女。玉を砂の庭も狹に。翻すや舞の袖袂。其の羽衣を着るからに。無量光明具足して。

飛行も自在なりけるが。不思議に得つる懈慢の咎め是非なくも。暫く下土に謫へて。現身となれるうたてさよ。現身の今ぞうたてき。

姫　なう〳〵。翁の待ちわびたまひて候ふ。

姫　何事にて候ふぞ。

と姫よきところに坐ふ。

翁　またも帝の御使の參らせられ候うて、勅命に背かば罪なはせられむとあるぞ。尚ほやは仕うまつりたまはぬ。

姫　なに。帝の勅命に背かば罪なはせられむずとや。それを怖ろしともおもほえず候ふものを。

姫　いや。若し宮仕つかうまつりたまはゞ翁には冠りをも賜はらむとなり。

姫　もはらさやうの宮仕はつかうまつらじと思ふを、強ひて仕うまつらせたまはゞ、其の冠りつかうまつりて死ぬばかりぞ。只去かせよとだに宣給はせ候へ。やがても消失せなむず。

翁　〈な、な爲たまひそよ。官さ冠りも我が子を見奉らでは何かせむ。さりながら、などて宮仕を厭ひたまふぞ。死たまふやうやはあるべき。

姫　さては尚ほ我が言を

姫　そゞろごとゝや聽きたまふ。三人の人に契りつる。其の約束もあるものを。帝の勅なればとて。豈空にせむ。高貴なるに。心移すと浮世人の。思はむことの便なさよ。

嫗　げに道理と覺え候ふ。さりながら、大宮仕を、も厭ひたまふを、若し彼の三人の人のうちにて、阿女が望みたまへる品を、眞に取得て來ま　さばいかに。

姫　誓詞は破るべうもあらず。切なる心の證し見する品を、實に持來む人のあらば、從はむも

是非なしとこそ。さはれ大かたの人心は

姫　世をいつはりの石作り

嫗　天竺に二つなき。御佛の鉢といふは

翁　とほ山寺の賓頭盧が。前に年經し煤け鉢。

姫　露の光りも宿さぬを。それぞとは淺き下だくみ。

三人　われ淺ければ世人皆。淺しとや思ふ忘れものの。あはれ。世に許多ありけり。あさましや。

翁　かの大伴の大納言は。有繋に詐る心は無し。

姫　蛟の頤に在りといふ。珠をば賜べといひければ

嫗　げに武夫の早りかに

姫　あさましや。咎なき妻をも去りたまひて

三人　さながらの手負猪の。たゞ勇みあらば足らむとや。無二無三に遠近の。山邊を獵り。谷に降りて

姫　蛟には逢はず

翁　蝮に嚙まれ

姫　たまをば取らず

嫗　蜂に螫されて

翁　手を空しうして歸られけるが

姫　やまうどのやうになつて

三人　やまうどのやうになつて。蝮に嚙まれてだに斯うぞかし。蛟に逢はゞ命あらじを。怖ろしの姫のやつが。人を殺さむとするぞとよ。と宣給ひけるこそをかしけれ。

（と謠ひなさむる途端に）

第四段

（此の家の僮高らかに笑ひつゝ駈け來る。）

僮　〈ハヽヽヽ。吉祥。きつしよ。きつしよ。祝はしめ。喜ばしめ。天が下の吉祥。

僮　〈あめが下のきつしよ。天が下のきつしよ。石の上の麿が。燕らめの巣から。てんころりと落ちた。子安貝が無うての。心安うおじやるの。おぞの麿よ。あはれ。燕らめの巣から。てんころりと落ちた。天が下のきつしよ。

（と拍子にかゝつて自ら謠ひつゝ果しなく舞ひ踊る。）

翁　〈やよ。何と申すぞ。石上の中納言のぬしが、あやまちしたまひつとは實か。

僮　〈なか〳〵。

嫗　〈さては燕らめの子安貝は、得求めたまはざりけるよなう。

僮　〈さん候ふ。いでや、燕らめのつまんびらかに、始終を語り申さう。

（と惡見得をして座を構ふることあり。さて左の俗曲につれて振事になる。（曲は陰にて唱ふ）。

僮　〈さても其の後氣は逆上り。心はいとゞいその

上。ふるき軒端に燕らめの。すはこそ子を産むござめれと。子安貝をぞ覘はれける。

〈折から一疋親つばめ。尻尾をおつたて。おつたて尻尾を。すん巣のまはりをひんらひら。ひんらひら〳〵。ひんらひら。時分は宵の間。そりや引いた。

〈ふごの綱引きや。綱引きや畚の。中の大臣が巣を探す。占めたり。何やら。へらつく。ひらつく。物こそ握つた。早おろせ。といふ間にぼつつり頭顛倒。脊骨を打つやら腰の骨。あいた。あいた。あいた。誰れに逢ひた。姫ぎに逢ひた。さて何を握つた。燕らの糞を握つた。

〈もの笑ひとぞなりにける。

と踊りをさむる少し前かたより彼方にて陽氣なる器樂の聞ゆることあり。姫耳をたつる思入ありて

姫　〈あれ〳〵。何人かまうで來と見えて候ふ。やよや、外にいで丶見て參り候へ。

僮　〈かしこまつて候ふ。

と門外に出で向うを眺むることありて

僮　〈はゝあ。あれこそは火鼠の裘とやらん、火にくべても焚けぬものを、持來うと受けあうた有福の愚人ぢや。ちやくと此のよしを申さう。

と門内へ戻り

童　〜なう〜。やんがて參りまするは、火鼠の裘とやらん、火にくべても焚けぬものを、持來うと受けあうた有福の愚人でおりやる。

翁　〜さては阿倍の御主人のぬしか。

童　〜みうしとやら、あめうしとやら、何れ鈍くさいをのこでおりやる。

翁　〜ともかくも爰にゐて、彼の人を迎へ申さう。

と一同居すまひを改むること。

第五段

此のうち下の浮きたる俗曲につれて、右大臣阿倍の御主人、小童一人をゐて、之れに火鼠の裘を入れたる箱をもたせ「かぎりなき思ひに焼けぬ裘、だもと乾きてけふこそは着め」といふ歌を麗しき短冊に書いたるを花の枝に着け、自ら肩にし、醉ひ浮かれたる體にて踊りつゝ場に登る。小童は始終かぜになる。（曲は陰にて唱ふ。）

御　〜かぎりなき。思ひに焼けぬ皮ごろも。袂乾きてけふこそは。君に逢ふとて身は爰許に。魂はふは〜蛻の唐の。船が媒つ。のふ。妹脊中。何の五十兩。とち萬兩も。君の爲なら。

何をしどりの。番ひ離れぬ。のほんほゝん。
ほゝんのほん。中ぢやえ。

と踊りながら竹取の家の門に着き、俄に眞面目になり、容體を作ることありて

御

これは、右大臣阿倍の御主人が、王卿といふ唐土人して、天竺より世にも稀なる火鼠の裘を、買取りて持參りて候ふ。はや〳〵受取らせられ候へ。

物體ぶりて言ふ。

翁

まづ〳〵御通り候へ。

このうち御主人は通りながら小童に指圖して裘の箱を翁の前へ直さす。

御

いや。先づ其の箱を御覽候へ。くさ〴〵の麗しき瑠璃を、いろ〳〵に彩りて、珍かに作りてあり。又取出いて裘をも御覽候へ。金青の色して、毛の末には黃金の光り

御

かゞやきたり。あな。畏こ。五十兩といふ。錢にも代へし寶ぞや。

と得意の體なり。此の間翁嫗打寄りて裘を取出し、さま〴〵に見ることとあり。

翁

げに〳〵、寶と見えて候ふ。

嫗

あな。めでたし。火に燒けぬことよりも、清麗らなること比ひなし。

と翁裘を捧げ持ちて起上り

二人　〈あな。かしこ。あな。かしこ。げに〳〵姫の。好もしがりたまふにこそありけれ。

と恭しく姫の前に直す。姫は只一目見て

姫　〈げに麗しき皮にこそ侍れ。わきて實の皮ならむとも知らず。火に焼かむに、焼けずばこそ

姫　〈人の言にも従はめ。なほ焼きて。試さむ。

翁　〈それよ。さも言はれたりや。

と裘を捧げ持ちて元の座に戻り、御主人に向ひ

翁　〈いかに。申し候ふ。焼きて見むことはざふらふ。

御　〈この皮は唐土にもなかりけるを、辛うじて求め得たるなり。

御　〈なに疑ひのあらなくに。いざ。火に懸けて。見たまへ。

と此のうち翁は僮をさしまねき裘を渡すことあり。僮は受取りて好きところに立出で

僮　〈さらばそれがしが火に懸けて見う。燃えぬとは稀有なものぢや。どれ、先づ、かざいて見う。

と火にかざす介。忽ちめらくと燃ゆる體。皆々驚く。

御主人は色を失ひ頭をかゝへ俯きてゐる。

僮　やゝ。これはどうぢや。

姫　さればこそ異物の

翁　かはにてやありし。

姫　のこりなく

御　もゆと知りせば皮ごろも……

姫　火にやは堪へむ微風にも。堪へじとぞ見ゆる

人心の。うたてやな。おかすがに。戀には神に似るなるを……

御　人にも似ぬか。我れはもや。錢を賴みて。此の日ごろ用はねば。あはれ。理智鈍り。騙られけるか。おぞの我れ。

姫　われ得がたきを求めしに。あるひは詐り

翁　あるひは又。直力に得むと急り

姫　あるひは他し力草を。只賴むこそ果無けれ。

御　げに錢をのみ賴みける。報いに理智の金錆び

て。騙られけるか。悲しやな。錢積めば理智も錆ふるよの。金滓に魂も腐蝕るよやの。

と萎れかへりて竊々と場を退く小童も從いて入る。

翁と嫗とは呆れたる思入にて見送る。

第六段

こゝへ御主人と入りちがへて車持の皇子に使ふる舍人旅裝のまゝにて急ぎ足に出來り門邊に停りて

舍　〔いかに。申し候ふ。やがて此のところへ車持の皇子の君の御渡りに候ふ程に豫め其のよしを傳へ申せよとの御事にて候ふ。

翁　〔なに。車持の皇子の君が、長き御旅路より立歸らせたまひぬとや。

舍　〔なか〳〵。蓬萊山といふところにて、奇なる玉の枝を得て、千餘日を經て歸りたまひつ。御家へも寄りたまはずして、此方へ眞直におはしまし候ふ。あれ〳〵。もはや渡らせられて候ふ。

と此のうち車持の皇子旅裝のまゝ先に立ち、玉の枝を入れたる長櫃を從者二人に荷はせ、小童に古びたる笠一つ持たせ、疲れたる體にて、場に登り、門べ近くなりて

皇　〔いたづらに。身はなしつとも玉の枝を。手折

らで更に歸らじ。

と諾ひ〳〵竹取が家に進み入りて上座にすまひて

皇　〔いかに。翁。命を捨てゝ玉の枝を、はるばると持來たりてあるぞ。とう赫映姫に見せ奉り候へ。

とすべて大へいなるこなしなり。此の間赫映姫思入ありて

姫　〔おぼつかな。三四年は。只思ふにだに經べかるを。さりとては疾しや人業。

と訝しむ思入。此のうち皇子指圖して舍人をして玉の枝を櫃より取出して翁に渡さしむ。翁は姫と共に之れを見ることありて

翁　〔げに此れこそは玉の枝。

姫翁　〔げに此れこそは玉の枝。枝は白がね。

皇　〔實は白玉。

姫翁　〔こがねの莖の目も文に。怪しきところ更に無し。

姫　〔人ざまも好き皇子ぞ。

翁姫　〔はや〳〵仕うまつりたまへ。

と翁夫婦は起上り玉の枝を捧げ持ちて姫の前へ直すこと。姫は其の

姫　〔そも何處にて此の玉の枝を得たまひけむ。先づそれを語らせられ候へ。

枝を手にも取らす。徐ら皇子に向ひて

皇　〔やすき御事。いで其の頃は前一昨年難波の浦より船出して、行かむずる方も知らざりしが

皇　〔思ふことならでは生きて何かせむ。思ふことならでは生きて何かせむと。御國の春を見すてつゝ。行方いづこと白浪に。風のまに〳〵漂へば

皇　〔ある時は浪荒れて、海の底にも入りぬべく

舍　〔ある時は風につけて、知らぬ國に吹寄せられ、鬼のやうなるもの出來て、殺さむとせしこともあり。

皇　〔ある時は貝を取りて命をつぎ

舍　〔ある時は種々の病をうけて、死ぬるにも倍す苦みをす。

皇　〔かくて船のまに〳〵漂ひて、卽ても死ぬるよと思ふうちに、五百日といふ日の早旦に

皇　〔神の惠みや厚かりけむ。不思議や遙かの海原に。前つ世の夢かとも。仄かに浮ぶ山見えた

り。風は和ぎ。浪は笑みて。目に見えぬ雨の絲の。濺ぐもよしや朝日影の。鈍めるもまた風情あり。

皇　〈これこそ求むる山ならむと

舍　〈船を岸邊へ寄せぬれば

と之れより皇子主從は徐ろに起ちて舞の介になる。從者一同聲を合せて謠ふ。

皇　〈紫翠漸く遠ざかり

一同　〈紫翠漸く遠ざかり。烟霏溟濛として。山影更に朧ろなり。登らむとすれど道見えず。只遠

近に微かなる

皇　〈くすしき鳥の囀り。

一同　〈迦陵頻伽の聲やらむ。

舍　〈さて崖面を經廻れば。苔は天鵞絨ふくよかに

皇　〈めぐし少女の柔肌。

一同　〈なめらにて溫よか。撫づる手も融くよ。さながらなりや綾錦を。剪みて懸くる草の花。

皇　〈美香人を睡らしむ。

一同
うらめづらしや。箜篌の音の。幾緒か切れて
ほのめくは。岩が根辺る眞清水。碧瑠璃の淵。
譬にあらなく。流るゝ水は水精の

皇
むすべば凝結る。

舍
溶けたるなり。

一同
時しもや谷蔭に。輝き出づる木々の枝。幹も
梢も白銀にて

皇
莖は黃金。

舍
實は白玉。

一同
見る目も眩むばかりなり。

皇
これこそは赫映姫の。ゆかしがりたまふ玉樹
よと

舍
からうじて船を寄せ。身を捨てゝ攀登り

一同
その一枝を手折りつゝ。後をも見ずして漕返
る。八重の潮路の浮沈み。憂涙にぞほたれて。
生きむ心もなかりしが

皇
大願の力にや。藻屑ともならで見みゆる。嬉
しさを思ひやりたまへ。人々。

と宜しくなさまる。翁姫は深く感じ入りたる思入。

翁　〜くれ竹のよゝの竹取。野山にも

姫　〜さやはわびしき節を見し。

皇　〜そのわびしさも忘られて。今日こそ乾け我が袂。つゝむに餘る嬉しさよ。

翁姫皇子を姫の傍らへ請ずる、其の間姫はやゝ思ひくしたる色あり。

姫　〜いかにせむ。心に著き譎詐も。色には何と明すべき。あら。術なの現身やな。

翁は姫の袂を引きて

翁　〜この上は左右申すべきところもなし。

姫　〜はや〳〵奥に入らせられ候へ。

二人して早起ちたまへと促す。皇子も起ちて姫に寄りそひ

皇　〜いまさら何をたゆたひたまふぞ。

皇　〜あら。心いられや。

と姫の手を取る。姫は痛く思ひくしたる體なり。

第七段

此の途端騒がしき亂調子の器樂につれて作物所の司の工人漢部の內麿といふ五十歳ばかりの男を先に、若き工人甲乙丙三人、そこぢや、そこぢや、そこぢや、といふ捨白をいひひ場に上り、內麿は右手に奉り文を挾みたる青竹を捧げながら門口に駈寄りて

內　こゝぢや〳〵〳〵。

と一同門內を窺き見て

工甲　さればこそゐたわ。

一同　ゐたわ。ゐたわ。ゐたわ。

舍　や。わるい奴が來をつた。

皇子の舍人目早くも之れを見つけて、從者らと目を見合せ思入あり。

從　わるい奴が來をりました。

困つたといふ思入。此のうち內麿らはつか〳〵と門內に入らむとす。竹取の僮走りいで、押し戻し

僮　どこへ〳〵〳〵。案內もせいで人の家へ、躍込むといふことがあるものか。ぢたい、わぬしたちは何者ぢや。

內　は。は。は。ゆるさしめ〳〵〳〵。願事でおりやる。願事でおりやる。

僮　〔ねぎであらうと、神子であらうと、今は珍客がわせられてぢやによつて、通すことはならぬ。

内　〔その珍客とやらに、用がおりやるによつて通さしめ。

僮　〔ならぬ。

内　〔とほさしめ。

此のうち皇子も内麿を見つけて驚く思入あり。

皇　〔あら。折わろや。如何にせむ。身の上の大事とこそはなりにけれ。

此の間僮と内麿は捨白にて押問答

數回あり。

皇子の從者二人は之れを機に工人らを追返さむと思附きたる體にて、同じく門外に出で僮と立並びて「いや、ならぬ」といふ。若き工人らは其れと見知りて腹を立て「そこが知つたことか。通さしめ」と突返す。僮これを見て腹を立て「おれがならぬといふわ」と工人らを突戻す。

工一同　〔いゝや。通さしめ〳〵。

僮一同　〔いゝや。ならぬ。ならぬ〳〵〳〵。

翁　〔あら。かしがまし。何事にてあるぞ。

と器樂に合せて入亂れて摑みあふ。

内麿は尙ほ器樂につれて從者の一人と摑みあひながら奉り文を高く

捧げて

内　きこしめせ〳〵。これは大切なる願事でおりやる。玉の枝についての奉り文でおりやる。

翁　なに。玉の枝についての奉り文といふか。

内　なか〳〵。あ痛〳〵〳〵。

翁　ともかくも其の奉り文を此方へ渡し候へ。

皇　これにて皇子は絶望の思入ありて事の破れとなりにけり。

と此の間尚ほ器樂に合せてなかしき立廻りありて、内幕は辛うじて奉

り文を翁に渡す。姫は思入ありて

姫　それにて讀ませられ候へ。

翁　心得て候ふ。なに〳〵。車持の皇子の君、前一昨年より賤しき工匠らと諸共に同じ所に隱れゐたまひて、貴き玉の枝を作らせたまひて、官を賜はらむと仰せ給ひければ、奴等心を碎き、力を盡して、千餘日を經て玉の枝を作りて仕うまつりつるに、祿いまだ賜はらず。あはれ、願はくは、けふなむ賜はせ、分ちて家子に賜はせむとす。あな、かしこ。あな、かしこ。

翁が此の奉り文を讀む間遠く狩の小角の聲聞え、次第に近くなること。皇子は進退谷りたる思入にて

皇　〜ゐるも起つも。はしたなりけり。

皇翁嫗　〜あさましや。

姫　〜たゞ言の葉を飾りたる。玉の枝なれば眞情の

翁嫗　〜根もなかりけり。いざさらば

姫　〜返したまへや。

翁嫗　〜返すべし。

皇　〜返すことばも泣きつらの

（玉の枝を皇子の前へ直す。と皇子は面をそむけつゝ之れを請けて）

一同　〜はぢこそ隱せ夕まぐれ。小暗きぞ便りなる。

（と起上る。舍人をはじめ從者、小童も起上り、一同聲を合せて）

暗きぞ便りなりける。

（と皇子は小童が持たる古笠を取りて面をかくし、悄然として門外に出づる舍人ら皆從ふ。此の時まで茫然と控へゐたりし內麿之れを見て、心附き、門外にて追ひ縋る。）

內　〜どこへ〳〵。どこへゆかします。官を賜ぶか。代を賜ぶか。

（と舍人の袖を控へる。皇子頷にて「打て」と指圖する。舍人心得て）

舍　〜こゝな奴が。思ひ知れ。これを賜ぶわ。

と拳を固めて内麿の頬を打つ。内麿仰様に倒れて

内　〈あいた〳〵〳〵。

此のうち皇子の一行は急ぎ足にて場を退く。工人ら一同出來りて介抱す。内麿やう〳〵起上り、悔しげに向うを見込みて

内　〈おどれ。逃してなるものか。逃すことではないぞ。皆もつゞけ。あいた〳〵。やるまいぞ。あいた〳〵。やるまいぞ〳〵。

と工人ら一同去る。此れより先皇子主従と入りちがへて帝大臣一人、其の他の官人大勢、小童、雜人らをゐて徐かに場に登り、好きところに立停りて、竹取親子を垣間見たまふ。御狩の歸るさに立寄らせたまへる

體なり。雜人らは獵の獲物などを荷ひたり。工人らの去ると共に帝の一行は歩みを進めて門に近づく。

帝　〈神かそも。人とは見えず。天地の

大臣　〈きよらなるものゝ萃つて。凝つてや人と現れたる。

帝　〈あら。微妙じの玉人やな。

これにて官人等一同聲を合せて

一同　〈あら。微妙じの玉人やな。耀く君の目を見れば。天に暐曄の星見えず。衣透る君の膚見れば。皎潔と清らにして。嬋姸と。四下に照り

満ち。透徹つて。今たそがるゝ春の花の戸月あらなくに。下界に降りゐる。玉兎の影かや餘んの光り。櫻が下枝に白銀照り。軒端の竹にも玉の光り。門邊に老いぬる松の葉も。金砂を篩つて燦けり。

帝　あはれ。玉人の容顔に比ぶれば

一同　人擧つて屍の。醜つ世に。女人の相をかりそめに。常住の命の影向して。開くや〳〵空華の帳り。猛火の燭を掲げつゝ。無明の夢をや醒すらむ。滓濁の酒の醉心地。闌なりけり世人の眠り。醒すや〳〵羸陋の眠りを。半死の

夢をや醒すらむ。

帝　ふしぎやな。詠むれば

大　あらぶる心も和ぎて

帝　けがれたるは

大　きよまり

帝　つち這ふ者もいつとなく

一同　つち這ふ者もいつとなく。妙なる光りに誘はれて。心に翼や生ひぬらむ。我れにもあらで大空に。念ひを馳するぞ不思議なる。念ひを

馳するぞ不思議なりける。

（諭ひ了ると帝は大臣に向ひて）

帝　はや〳〵姫を伴ひ候へ。

大　かしこまり奉りて候ふ。

（と大臣は徐かに數人の官人を率ぬて竹取が家に入り、姫の傍らへ進む。帝も他の官人を從へて續いて入りたまふ。皆々驚く思入あり。）

姫　これはいかに。何と遊ばされ候ふぞ。

（此の時帝正面に進みいでたまひて）

帝　けしうはあらぬ者なり。此の國のあるじぞ。徐りに比ひなく可愛しうおはすれば、吾が家

へ將てゆかなむとす。

姫　うつくしと思せばとて、將てゆかせたまはむはざふらふ。春の花も詠めてこそ。

姫　たをりたまふは風雅なし。彼の仲秋の明月も、人は只。影をこそ夜もすがら。

（と立離れむとするを帝とゞめて）

帝　いな〳〵。愛でゝ、やは欲しと思はぬ。領せむと思ふをこそ、切なる戀の誠といはめ。

帝　ゆるさじな。ゐてゆかな。

（と袂を捉へたまふ。）

姫　この國に生れて侍らばこそ。

姫　〜あておはしがたくや候はむ。

と徐かに捉られたる袂を拂ふこと。

帝　〜などさることのあるべきや。……

と再び捉らへむとしたまふ途端に忽然として姫の姿見えずなる。皆皆驚く。

官一同　〜こは〳〵いかに。

翁嫗僮　〜こはいかに。

一同　〜げに凡人にはあらざりけり。

と一同呆れたる科介。

帝　〜いでさらば、あてはゆかじとよ。もとの御容になりたまひね。

帝　〜あかなくも。まだきに月の隱るゝや。さしも妙なる影をだに。詠めて秋を慰めむ。影をだに現じおはしませ。

と殘り惜しげの御有樣なり。されど姫は尙ほ形を現さず。只いづこともなく聲ありて

姫　〜いな〳〵。月は戸外にいでゝ。見るべきものぞ。春の夜の

此の時大臣徐かに帝の傍らに進み寄りて

大臣
はや更けそめぬ。

翁嫗
ともかくも

官一同
こよひばかりは九重に

（官人一同大臣の後へに従ひて）

と還御を勸め奉る介よろしくある、
帝聽容れたまはぬ思入にて

帝
などか歸らむ。戀の山。あなた面に隱ろひし。
君をとゞめて歸らむは。魂とゞめたる心地し
て。物うくぞあるや。幾たびも

と皆々に促されて一たびは歸らむ

翁嫗も恭しく進みいでゝ

としたまひながら、又立もとほりた
まふ。一同聲を合せて

一同
また幾たびも行返り。背向きて停まる。姫ゆ
ゑに。……

と此の途端姫の容ほのかに彼方に
現れたる心。帝目早くみそなはし
て

帝
あら。なづかしの面影やな。……

と走り戻らむとしたまふを皆々と
どめ奉りて

大臣
こは現なの御風情。

官一同
ありとも見えぬ幻影を。我れからや見いでた

まふらむ。よし在りとても玉の橋の。水に映らふ影なれば。渡らば絶えむ中空に。浮べる貝の花の城。たゞちには誰れか上らむ。時も術もあるべきを。御心鎭めおはしませ。

と皆々なだめ奉る。

翁嫗

〜げに時こそは靈しきもの。やがても術の候はむ。かしこけれども今は只

一同

〜只其の影を御つとに。こよひは還御あらせたまへ。九重に還御あらせたまへや。

と諫めつゝ送りいだし奉る。帝いと殘り惜しげに見返りがちに出でたまふ。

後之幕

第一段

蓬萊宮の侍女甲・乙二人幕に登る。

甲

〜されば よ。月には物をも思はぬげの御氣色して在らせらるゝ。悲しげに見えさせらるゝ。

乙

〜さりよの。姫君が月を御覽じて、物思はしさうに見えさせられたは、此の春の始めよりでおりやる。月の影を見るは、忌むことぢやとあつて、人々が制めさせられたなれど、ともすれば、人間には、月を見て泣かせらるゝ。げに

まふらむ。よし在りとても玉の橋の。水に映らふ影なれば。渡らば絶えむ中空に。浮べる貝の花の城。たゞちには誰れか上らむ。時も術もあるべきを。御心鎭めおはしませ。

と皆々なだめ奉る。

蘭姫

〈げに時こそは靈しきもの。やがても術の候はむ。かしこけれども今は只

一同

〈只其の影を御つとに。こよひは還御あらせたまへ。九重に還御あらせたまへや。

と諫めつゝ途りいだし奉る。

帝いと殘り惜しげに見返りがちに出でたまふ。

後之幕

第一段

赫映姫の侍女甲、乙二人場に登る。

甲

〈されば よ。闇には物をも思はぬげの御氣色して在らせらるれど、月の程となれば、甚じう悲しげに見えさせらるゝ。

乙

〈さりよの。姫君が月を御覽じて、物思はしさうに見えさせられたは、此の春の始めよりでおりやる。月の影を見るは、忌むことぢやとあつて、人々が制めさせられたなれど、ともすれば人間には、月を見て泣かせらるゝ。げに

此れは只事ではあるまい。ともかくも、此のよしを改めて刀自の君に申さう。

甲　〔よいところへ心附かせられておりやる。とりわけて今宵の望の月をば、堪へがたげに詠めさせらるゝ。早う家刀自に申して、心得させ申したがようおりやらう。

乙　〔なか〳〵。それがようおりやる。さらば、早う申さう。おりやれ〳〵。

侍女二人とも場を退く。赫映姫愁ひに沈める思入にて徐ろに登場す。

第二段

姫　〔かひなしと思ふ涙に昏されて。朧ろに見ゆる月の影。うつし身ごゝろぞ理なき。

と舞臺正面の好きところまで來て停る。

姫　〔罪の限りの果てぬれば。罪の限りの果てぬれば。今宵を秋の名殘にて。復た立還る月の宮。げに人間百たびの春秋は。天上の幾時ぞや。あはれ。无量妙光を具足して。眼裡に妍媸無う。念頭に是非を斷じ。來去無礙にして。飛行自在とならむ身の。よし嬉しさはありとても。痛ましや。老人の。瑞齒ぐむなる今更に。最愛兒に棄てられて。生死苦樂の塵塚に。埋れ留まる憫れさよ。我れ未だ現身の。結縛の惱み歴然に。思ひやられて堪へがたやな。

と跪坐きて打歎く科介あり。

第三段

翁と嫗と場に登る。歎きぬる姫の傍らにゐよりて

翁　〔こは何事にて候ふぞ。いぬる日も申しゝ如く、御心に任せぬ事もあらば、打明けて語りたまへとこそ。

嫗　〔なう。あが佛、御覽せよや。翁は片時の間に、斯うも老いたまひけるぞや。髪も白う、腰もかゞまり、目も爛れにたり。

嫗　〔これ皆姫の御上を

「ぞよ」ハ「ぞとよ」ノ誤

翁嫗　〔思ひ煩ふ餘りぞよ。

と愁ひの科介あり。姫は徐かに面をあげて

姫　〔さきぐも申さむとは思ひしかど、必ず心惑はし給はむずらむと思ひて、今までは過し侍るなり。

姫　〔さのみやはとて打出づる。ゆめ〳〵驚きたまふなよ。我が身は此國の人ならぬ。月の都の天少女。往昔の契りあるにより。暫く人界に假の親と。馴らひ聞えて候ひしが

姫　〔今は歸るべきになりにければ、今宵故の國よ

り、迎の人々の參うで來むず。さらず去りぬべければ、おぼし歎かむが悲しさに

姫　〈不老常樂の彼の國へ。去らむずるもいみじからず。春よりも歎き候ふなり。

翁　〈こはなでふことを宣給ふぞや。竹の中より見つけ聞えたりしかど、菜種の大きさおはせしを、我が丈立並ぶまで養ひ奉りたる我が子なるを、何人か迎へ聞えむずらむ。いかでか許し候ふべき。

姫　〈さりとても彼方には眞の父母の候ふものをや。

翁　〈よしや眞の父母ありとも、年來の恩顧をば、よも忘れたまふまじとよ。

翁　〈人に取らるゝ程ならば。我れ先づ死なめ。渡さむや。

翁　〈あの塗籠に姫を入らせ、其の戸をば鎖固め、母屋には僮どもを番にするて守らせ、尙ほ御門に奏しまつりて、武人の人々を賜はりつゝ

翁　〈月の都の人し來ば。捕へさせてむ。心せよ。

と氣色ばみて嫗に向ひ

と座を起つ。嫗は姫を促して諸共に起上りながら

嫗　〔いざさらば我が姫を

と翁先に、姫次に、嫗後に引添うて

三人　〔あの塗籠に鎖籠めて。あの塗籠に鎖籠めて。

守り戦ふ準備も

と次第に奥へ向ふ。

姫　〔かひこそなけれ。風ならば

翁　〔とさしても妨げ。

姫　〔かたちあらば

嫗　〔矢しても射らめ。

姫　〔たま幸ふ。神の迎ひを如何にせむ。生死も無き久堅の。天なる人を如何にせむ。人力を頼みたまふなよ。

と翁嫗は姫を守護する體にて奥に入る。

第四段

前の幕に出でたる僮酒に醉ひたる體にて高笑ひをしつゝ蹣跚々々場に登る。侍女甲從いて出る。

僮　〔ハヽヽヽ。何ぢや。天人が姫君を取りに來る。あるべいことかいやい〳〵。ハヽヽ

女　〈なう〉。笑事ではおりない。酒の酔を醒まいて聞かしめ。

　　これにて憧むつとしたる思入。

憧　〈こよひは望の祝ひぢやによつて、酒をたうべたが何としたぞ。いはむすべも、せむすべもなう貴いものは酒にしある、と宣給はせられたではないか。

女　〈酒をたうべたをあしいとはいはぬ。酔を醒まいて聞かしめといふことぢや。

憧　〈何を聞くのぢや。

女　〈はて、天人が姫君を取りに來るによつて、母屋

にゐて、きつと番をせいといふ命令ぢやわいの。

憧　〈天人が取りに來るによつて、母屋にゐて、きつと番をせい。ハヽヽヽ。わつけもないことをいふ。さて何として番をするぞ。

女　〈戸を悉に鎖固めて番をせいとある。

憧　〈何ぢや。悉に戸を鎖せ。悉に戸を鎖いておけば取らるまいといふことか。

女　〈なか〉

憧　〈そのやうなことは、兎角酒飲まぬ人が、さかしげに言ふことぢや。あな醜く。賢明をすと

酒飲まぬ人をよく見れば猿にかも似る。猿にかも似る。ハヽヽヽヽ。して、おぬしは、其の天人とやらを見たことがあるか。

女　〈なんの、あらうぞいの。

僮　〈ないものが、何として來といふことを知つた。

女　〈あるじの君が然おほせられた。

僮　〈して、それは、如何やうな形の物ぢや。

女　〈さればいの。翼が有るものとも、無いものとも、又見る者の心々に見ゆるものともおほせられた。

僮　〈ハヽヽヽヽ。そのやうなものならば、何の、戸を鎖すに及ばう。疾う降りて來。目に物を見せう。

女　〈すりや天人が怖うはないか。

僮　〈ハヽヽヽヽ。何の天人とやらが怖からうぞ。尚ほ醉ひたる介にて、下の俗曲に合せて振事になる。時々侍女を無理やりに引出して枷にすることあり。（曲は陰にて唱ふ）

僮　〈酒五勺。飲んで浮世に怖いもの。何のてんぽの梨の皮。酸いも甘いも苦いのも。とんと忘れた其の味が。なぢよにも。かぢよにも。か

ぢよにも。なぢよにも。忘られ。られぬを何とすべい。

〈人に生れて憂見むよりは。壺になりたや。酒壺に。香りに〈〈。酒の香りに浸みたやの。此の世樂しく暮さばまゝよ。來む世は鳥でも。けものでも。鳥でも〈〈。蟲になろとも何のその。

〈雌ならおじやれ。雄でもおじやれ。さつても。さつても。面白天女の。舞の羽袖は。てんと面白かむがらす。雄天はしやつ面。引搔き毟つて。しやつ羽根ひつぱぎ。しやつ骨たゝいて。寢酒の下物に。下物に寢酒の味もよや。

〈おもしろや。

と浮れ踊るうち、女は偶と四下を見て驚き騷ぐ思入あり。

女　〈やゝ。これは何としたことであらう。四下が凄じう明るうなつた。

僮　〈何さま。いかう明るうなつたわ。

女　〈や。女は空を見あげて驚きたる思入。お月が、いつもよりも、いかう大きう見ゆるではないか。

僮　〈何さま。大きう見ゆる。

女　〈やゝ。二かさも大きい。

僮　〜や。見る〜大きうなる。や。例よりも五倍ほどになつた。や。十倍にも……

と慄へだして

僮　〜これは只事ではおりないぞ。

と怖るゝ科。

女　〜やれ。怖ろしや〜。こゝにゐたら照り殺されうも知れぬ。早う逃げう。

僮　〜いかにも。早う逃げう。

二人　〜やれ。おそろしや〜。

と可笑味の器樂に合せて仆つ轉びつして場を退く。

第五段

此の時はるか彼方に勇壯なる器樂の調べ聞えて、六衞の司、某（二千人の）武裝せる武人を率ゐて馳付け來る。司は古風なる烏帽子を戴き、身には鎧を着て、弓箭を携へ、眞先に立ち、武人、凡そ六人は同じく弓箭、又六人は矛、又六人は拔放ちたる劔を提げたり。勅命を受けて、天人を防ぎ捕へむ爲に寄せたるなり。

一同　〜大君の勅かしこみ。山は裂け。海はあすとも。怒猪の。かへりみせじな。益荒我れ。

と舞臺正面に來りて一同大空を見上ぐる介ありて

司　〔あれを見よ。不思議やな。

一同　〔あれを見よ。不思議やな。折しも今宵仲秋の。望の月の輪見るうちに。十ばかりも合せたる。爛銀盤の光りとなつて。耀き輝く眞晝の光り。風遠近の。草の葉。木の葉の。葉色も。葉竝も。透徹つて。驚き飛交ふ羽蟻の。翅の文理も掲焉たり。

（此の時いづこともなく神々しき器樂の調べ聞ゆること。一同耳を欹つる思入ありて）

司　〔ふしぎやな。天地爛然として。今まで在りつる大月見えず。

一同　〔いづこともなく妙音聞えて。彩雲流るゝ天の一方。見よ。煌星のやうなるもの。群り。燦き。列を作つて。見よ〳〵。髣髴降り來る金龍。次第に近づく妙音樂の。調べも今や闌に。靈香薫じ。花降りかゝつて。あれ〳〵。間近く屋のむねに。怪しきものゝ降立つたり。

（一同たぢ〳〵となりて左右へ分れて退くことあり。司は尙ほ空を見上げて）

司　〔飛ぶ車には七寶耀き

一同　〔飛ぶ車には七寶耀き。翳せる羅蓋は萬華の彩り。ひらめく羽袖は透く金銀の。たゞよふ裳

裾は棚びく白炎。面は宛然明星の。見むとすれども。眼眩むで。瞬く間に。天地山川。只爛銀と化してんげり。

と皆々目眩く思入尻居にどうとなる。そのうち六衛の司は奮然として起上り弓に箭をつがふ。全軍また武者ぶるひして奮ひ起つ。

司

〔すはや妖怪ござんなれと

一同

〔すはや妖怪ござんなれと。弓に箭つがひ。矛劍を。振りかざいて立つことも。あら。何とせむ。手に力も。痿えかゞまるこそ不思議なれ。

と一同又たぢ〳〵となりて或は弓

箭をおとし矛劍な心にもあらで抛ちて尻居にゐる。司ひとり無念の思入にて突立ちあがり空を睨みて

司

〔などてか得射ぬことあらむと。射れども〳〵。皆外さまに

と又弓を引絞りて幾たびか箭を放つ科。皆逸るゝ心。

一同

〔それて正しく現ながら。覺るゝやうにぞ。立縮むことの怪しさよ。

と皆々呆れたる科。尻居にどうとなりて、動かれぬ思入。

第六段

此の時、いづこともなく神々しき器樂の調べ聞えて、其の調べの仄かに成りゆけるころ、高きところに只聲ばかりありて

一人

〈造麿。みやつこまろ。

と呼ぶ聲す。奥より翁、夢見る心地にて、我れにもあらず出で來る。

翁

〈夢に夢見る心地なり。誰人の我れを召したまふ。

と好きところへ來て、空を仰ぎつゝ跪坐く。又前の神々しき器樂の音色聞ゆると共に、同じく高きところに聲ばかりして

一人

〈いまし。をさなき人。宿世の縁故あるにより て。絶えて人の世には在すまじきを。片時の程とて降しゝを

一同

〈おほしたてつる功あれば。そこらの年ごろ。そこらの幸を賜はつて。身をし換へたる今更に。何をか歎く。彼の君を。はや〳〵返し奉れ。

器樂やむと、翁はやう〳〵に面を上げ、おそる〳〵空に向ひていふ。

翁

〈その昔は、人としも見えたまはざりしを、皆人のあこがるゝ美妙しの御相に養育てまゐらせぬるは、一へに老生が功力なり。二十年餘

りにもなりぬれば、生みたるにもひとしからむを、ゐて歸りたまはんこと、理なうこそ候へ。

と喞言がましく言ふ。これには何の答もなくて、又しばし前の妙音樂聞え、高きところの聲は奥の方に向ひて

一人　いざや。いざ。

一同　いざや。いざ。穢きところに何時までか。かくて在せむ。いざや。いざ。大空へ還りたまへや。

妙音樂の調べ、やゝ近う、やゝ急調となりて、靈香薫じ、花頻りに降りかゝる心。一同又更に驚く思入。

翁　こはいかに。こはいかに。降りくる花の薄が

すみ。立籠めにたる塗籠も

一同　たゞ開きに開き。簾子なんども。人あらなくに。只開きに。明けゆく山の端の。雲切れて。朝媛神ぞ出でたまふ。

と奥より赫映姫、前の段の裝束のまにて、徐々と立出づる。

第七段

と其の後より姫を先に、侍女甲、乙呆れ驚き、後追ふ心にて從いて出る。

姫　あれよ〳〵。何とせむ。

姫女

〈あれよ〳〵。何とせむ。あら〳〵。悲し。何とせむ。

姫好きところに停る。姫侍女らは翁の傍に坐ふ。翁は姫に向ひて打歎く思入にて

翁

〈われらをば

姫翁女

〈われらをば。いかにせよとて振棄てゝ。天には登りたまふらむ。具してゐておはしませ。伴ひてゐておはしませ。

と姫のかたへ居ざりよりて、愁歎の科あり。姫もこれを憫れと思ふ思入ありて

姫

〈おん上は申すもおろかになむ。さらぬ人をも、かゝる折に伴ひてゆかまほしさに、得がたきをも覓めつれど、人心のあさましう、空頼めとなりぬることの、返す〴〵も本意なくこそおぼえ侍れ。

此の間に何處よりともなく雪のやうに白き色したる羅衣舞ひ下る。それを姫の手に取ることありて

姫

〈今はとて天の羽衣着る折ぞ。人の世いとゞ哀れなる。假の縁の薄ごろも。脱ぎすてゝ去る空よりも。まろび墜ちなむ思ひなり

と泣く科。翁、姫も涙にむせびて

翁

〈つらからば只一むきにつらからで

姫　なげの情けのなか〳〵に。住みうかりける空し世を

二人　君の妙相見えずならば。いかでかは命永からむ。あら。淺ましの別離や。あさましの別離よやな。

と左右より姫の袂にすがりて歎く。姫辛うじて袂を拂ふ。翁と姫とは左右についゐて泣く。

第八段

姫、侍女をして羽衣を我が身に着せかけしめむとす。此の途端に彼

方に勅使、内侍、中臣の房子の聲して

内　なう。去ばらく。その御衣去ばらく控へさせたまへとこそ。

と莊重優婉なる器樂の調べにつれて、内侍中臣の房子、女官數人をゐて出で來り、好きところに停りて

内　大内よりの御勅使にて候ふ。去ばらく止まらせられ候へ。

姫　何。御勅使とざふらふや。承るほどもなし。とゞめたまふとも効なきなり。

内　いやとよ。永く止めさせたまはむとにはあらず。せめて御別れに、此の御製を御覽ぜら

れよとの御事にて候ふ。

と恭しく短冊を女官して姫に渡さしむ。

姫　〔おん名殘の御歌とや。

と短冊を受取らむとするとき空中に人ありて、姫に何事か語ることあるものゝ如し。姫空中の人に向ひたる思入にて

姫　〔いやとよ。

姫　〔人間別離の幾時は。天上の只刹那なるものを。

さのみな急かせたまひそ。

と女官が手より短冊を受取り

姫　〔羽衣を着るときは、心殊になるなれば、

姫　〔うつゝ身ながら。讀まばや。

と此の時一種言ひがたき寂しき悲しき器樂の調べ聞ゆ。姫御製を讀む。

姫　〔月影の入りぬる後に思ふかな。迷はむ闇の行末の空。

と讀了りて短冊を翁に渡す。翁受けとりて

翁　〔月影の入りぬる後に思ふかな

嫗も姫も聲を合せて

三人　〔迷はむ闇の行末と

姫徐ろに上手へ立離る。

内侍

〔叡慮かしこき御歎き。思ひやり奉るだにも恐れあり。いでや勅諚を傳へむ。

（と此れにて女官一同も容を正し、聲を合せて）

一同

〔夫れ一天下の人主の心は。水に喩ふ黎民の槃盂にして。山野に渡る四時の風。吹きのまに〻靡き。又枯るゝ。まに青人草の。萌えいでゝ其の源の眞光りの。曇らば闇の末如何に。

（こゝに至りて武人一同恭しく容を正し列を整へて女官等に聲を合せて唱ふ。翁嫗等は默してなり。）

一同

〔曇らば闇の末如何に。あかで止みぬる月の影を。せめては心に現さむ。又來む世々の紀念を。遺したまへや。行末も。御面影を思ひでゝ。さやけかりきと語らむに。遺したまへや紀念。

（と此の長き同唱の間に赫映姫は舞臺の奥の方に退き侍女ら介添となりて、徐ろに被たる花やかなる上衣を脱ぐことあり。さて同唱の終らんとするころ、一人の侍女をして脱ぎたる衣を、他の一人をして羽衣を捧げ持たしめ、さて又自らは奇なる形の小き瓶を右手に携へて、元の居どころに立戻り、同唱終ると徐ろに一同に向ひ）

姫

〔入りぬるも最後ならず。盈ちぬるも又虧くるなる。月の輪ぞ我がたゞずまひ。今はしも脱

ぎおく衣を形見とも。満ちぬる月の秋の夜は。
必ず見おこしたまへやとよ。

と侍女をして脱ぎたる衣を女官に渡さしむれば、内侍女官をしてそれを受けをさめしむることあり。姫は更に翁嫗の方をかへり見て

姫

〈おぼろ夜の。只影にのみ憧るゝ。徒人も多き世に。二十年の其の間。あが子と憐み。うるはしの。人ともならしめたまひつる。功徳の報い。賜ぶぞ今。千年も死なぬ靈藥。有爲の世の稀事と。稱へられたまへ老人よ。假の世の父母よ。いでさらば。現世。

と携へ持てる小き瓶を翁に渡すことあり。やがて侍女は羽衣を捧げて進みて姫に着せかくる。翁嫗は忍びかねたる思入にて

翁嫗

〈逢ふことも涙に浮ぶ我が身には。死なぬ藥も何かせむと

と藥の瓶を傍に棄ておきて

翁嫗

〈我れにもあらで走りより。これこそは怨みなれと。御羽衣を取らむとすれば

と翁嫗姫の傍らへゐざりよりて羽衣の袂を捉ふると、女官も武官も一同驚きたる思入にて空を仰ぎ

一同

〈また降頻る花吹雪。靈香四邊に滿ち〳〵て。心耳に徹る妙音樂は。頑の心をも蕩して。骸は地に。たましひは。虚空に彩雲の棚引きて。

はや舞上る媛神の。白雲の袖ぞ妙なる。

（此のうち姫羽衣を着了りて、徐ろに舞がゝりになる。皆々左右へ開いて驚き詠むる思入科介あり。かくて神々しき器樂の調につれて姫舞ふことよろしく、さて好きほどに舞ひ進みて）

姫

〈満ちぬる月の夜々は。我れを見おこせ。浮世人。

（此れより下の曲の間始終立舞ふこと。）

一同

〈圓満美妙の御相。

内侍等

〈あるひは山河草木に影を寓し

翁嫗等

〈又は人間に照臨し

武人等

〈餘んの光りは宇宙を含む。

一同

〈たへなり〳〵。彩雲の。棚引く空に。燦めき。ひらめく天の羽衣。靡くも返すも光りの眞袖。

内侍等

〈月見れば。千々に悲しき故よしを

一同

〈ちゞに悲しき故よしを。今こそ悟れ。月見れば。醜の世いとゞ醜くけれ。三五夜中の影は又。滿願眞如と聞くからに。尙あこがるゝ人心の。遣る瀨なきこそ有理なれ。

〔見るうちに。見るうちに

一同

〔ふる花吹雪。彩雲も。薄れに薄れ。妙音樂の。調べも遠く。遠くなつて。天の羽衣。燦然に。閃く羽袖も微かになつて。やがて纖塵も中空に。只明月ぞ殘りける。明月ばかりぞ殘りける。

姫舞ひをさむると、一同よろしく立ちかゝりて空を見あげ、隨喜渴仰の思入、科介。すべて活人畫模樣。

大尾

19268

明治三十八年十一月一日印刷
明治三十八年十一月四日發行

定價金八拾五錢

著者　東京市牛込區大久保余丁町百十二番地　坪内雄藏

發行者　東京市小石川區音羽町四丁目十一番地　荒川信賢

印刷者　東京市京橋區築地三丁目十五番地　野村宗十郎

印刷所　東京市京橋區築地二丁目十七番地　株式會社東京築地活版製造所

著作權登録濟

發行所　東京市牛込區早稲田　早稲田大學出版部

19268

發賣所

博文館

東京市日本橋區本町三丁目

其他

全國各地書林